

寝袋

猛暑の夏が終わった頃、その男が入社した。別に取
り立てて言うほどの人物ではない。出勤すると、プレ
ハブの事務所の前にそいつが立っていて、パンパンに
ふくらんだシヨルダーバッグを肩にかけ、大事そうに
手で押さえていた。眉尻が下がり、陰気くさいが、ど
こにでもいそうな風貌の持主だ。奴が軽く会釈したか
ら川辺も、「どうも」とお辞儀をした。

会社は運河沿いの倉庫の中にあり、一階と三階で作
業をしている。ある日の朝礼の時に年の若い所長が、
「うちの会社で、難しい仕事は何一つありません。自
信を持つて取り組んでください」

挨拶をした。川辺には、こんな有難い言葉はなかつ
た。何をやっても不器用だから、寛大な所長に好意を
抱いたほどだった。ここでは、流れ作業の忠実な一員
になつていれば、どうにか通用する。彼は高度な能力
を要しない単純作業が気に入っていた。就職情報誌で
事務機の《組立作業員募集》の文字を目にした時、ハ
ツとして俺にもできると、応募する気になった。

有坂 広一

伊奈商事はある大手の下請けのさらにその下の孫請
けで、従業員は三十人近くいる。川辺は一階のSG型
の作業員で、壁際のラインで流れ作業式にビスを打ち
込んでいく。彼は検査係だからチェックして、シール
を貼り付ける役割だった。二三日した三時休みの時、
新入りの社員と初めて口をきいた。

「どこから通っているの」

尋ねた。矢沢という男は首を傾げ、考える顔つきを
して、少し間をおいてから「——町」と短く答えた。
そんな仕種をしたのは尋ね方が気に入らなかったから
なのか。しかし向こうも直ちに「そっちはどちらから」
と聞き返した。

「江戸川区の蓮場」川辺は答えた。

「へえ。そうなんだ。俺はあそこには詳しいよ。どの
辺りなの」

「マア、団地だけだな」

「何という名なの」

川辺は洪々一丁目団地と答えた。

「これは偶然だね。そこは、俺が知らない訳がない。建てる時、現場で働いていたんだから」

川辺は嫌な気がした。

「俺に蓮場は懐かしい土地よ。青春そのものだな。酒、女、ギャンブル、その他、色々あつてね」

一人で悦に入っている。ますますおぞましい気分になった。

「結婚しているの」

「ああ、しているよ」仕方なく返事をした。

「そうか、かあちゃんがいるんだな」

その言い方も品がない。そして無遠慮に見つめた。

川辺は、背はあるほうで、そばかすが多くて青白く細い体つきをしており、およそ権威や威厳らしきものはない。

「俺と同じ独り者に見えたけどな」

「一緒にしなくとも、いいさ」

「家庭があるのはいいなあ」

そんな話をしていたら、始業のベルが鳴り、皆はぞろぞろと作業場に向かった。川辺は四十歳を過ぎたばかりの時に入社し、一年が経った。給料は安くボーナスも一ヶ月を切っている。小五の娘が一人いて、妻のパート勤めで生活費を補っている。楽しみと言えば週

三日の晩酌で、五百ミリの缶ビール一個と焼酎を少々飲むくらいである。ありきたりの慎ましいプロレタリアートだ。

矢沢が社員になって半月した頃である。その日、定時前に作業が終わり、何人かと倉庫の外に積んであるパレットに座って、雑談をしていた。その時、矢沢が意外なことを口にした。実は、自分は都の施設から通っているのと打ち明けたのだった。なるほど、そうだったのか、それで納得した。だから最初の日、住まいを聞かれて戸惑ったのだ。大きいバッグには大事な必需品が入っているのだろう。後はあけすけに喋った。酒や麻薬に溺れ、肝臓を患って入院した。どうにか治療をして退院したものの、行くところがない。病院の院長の紹介で施設の寮に入れてもらった。部屋代、食事代、風呂代、散髪代は皆支給され、毎日持参する弁当もタダである。

「税金で生活をしているなんて、結構な身分だよな」

矢沢と親しくなった所ところがからかった。

「うるせえ」

「都民に感謝しろ」

「黙れ！」

矢沢と所は相棒になり、いつも一緒だが所は口が悪

く、それも矢沢に限られていて、漫才のコンビのように突つ込みの所は、ぼけの矢沢に辛辣な悪態を浴びせた。

一ヶ月ほどした頃、またどこからか社員が移つて来た。どう見ても災いをもたらしそうな顔つきをしていて、一目見ただけで嫌悪感を抱かせた。板橋倉庫にいた島田という男で、所も真つ先に拒絶反応を示した。

「あんな奴はいらんよ。な、そう思わんかい、矢沢さん」

「うん、いけ好かないオッサンだ」

「皆で追い出しちゃうか。俺が先頭に立ってやってもいいぞ」所が強がりと言う。

「あんたは威勢だけはいいな」と矢沢。

「あつたり前よ。こちとら、木場生まれの下町っ子だからな」

「それはいいけど、その前に、所さんが不要と言われるぜ。片足を引きずっているしな」矢沢が平然と弱点を突いた。

「馬鹿野郎。てめえなんぞに親の産んでくれた身体のことを言われる筋合いはねえ。二度と口にしたら、承知しねえぞ」

所は負けん気が強く、年長の矢沢を完全に牛耳って

いる。川辺はとてもああいう会話はできない。そして、いつもの調子で話が脱線しそうになつた。

「内輪もめすることはないよ。敵は島田だからな。しばらく様子を見よう」

川辺は鷹揚に割つて入つた。

「それもそうだな」

矢沢と所が賛成した。島田がどんな人物か見極める必要がある。人好きのしない島田のような奴でも群がる社員がいる。無気力で俺は赤ん坊みたいな男だと自己卑下し、妻とのセックスを自慢する中年の社員や、その義理の弟だったりする。義弟は小柄で痩せていて鳥のガラと言われている。水商売を渡り歩いて来て、取り柄と言えば口が達者なくらいで、しかし欠勤ばかりし、休みだすと一週間も十日も続く。また朝から酒の臭いをさせている依存症などもいる。こんな連中でも連帯すると圧力になり脅威である。日々が経つにつれて、島田の実体が見えて来た。特に注意を凝らしているわけではないけれど、彼の一举手一投足は目につく。仕事中にしばしば隅の方に行つて、手鏡を見ながら、櫛で髪の毛を直す癖があつた。五十面した男のやることではない。体つきもナヨナヨしておかまっぼい。そうかと思うと、作業場の床に唾を。ペッペツと吐くか

ら汚いといったららない。川辺が鏡のことを話題にした
ら鳥のガラが、

「カツラが気になるからじゃないの」意外な情報をも
たらした。

「あれ、そうなのかい。気がつかなかったなあ」

川辺は虚をつかれた。そう言えば、髪は青白い老け
た顔には不自然な感じがする。改めて見るとかなり剛
毛である。

「しかし、本物に近いね」

「それだけ金をかけているからだよ。凄い金持ちだか
らな。家だって、総檜造りだぜ」鳥のガラが強調する。

たしかに金のあることは普段から口にした。一万円も
するお茶を飲んで、妻のおふくろに羽毛の布団を
送った、ゴムバンドで止めた六十万円の金を落とした、
毎月いくら貯金をしているとか、そんな話を折に触れ
てする。元は理容師だったが、親の遺産が入ったらし
く、金持ちになった。しかも事業もやっている。そん
なに金があるのに何故労働の現場で働くのかと言うと、
暇つぶしだそうである。家においても妻しかいないし、
友人もいないから退屈を持て余している。それで知り
合いの社長に頼んで働いているわけだ。

このところ、島田とのいざこざが絶えない。エゴを

むき出しにするようになった。その日の会社の帰りも
所と一緒にいたら、ひどく腹を立てていて興奮気味
だった。理由を聞いたら、

「あの野郎が俺に仕事が遅いなんて、抜かしたんだ。
殴ろうとしたら、課長が止めに入ったから、止したけ
どな」と話した。

「所さんにそんな言い方をするなんて、卑怯だな」

「な、そうだろう。で俺はハンデイを背負っているか
ら仕方がないだろうと、ガンガン言っちゃった」
「それでいいよ。黙っていたら、ますます凶に乗るか
らな」

「喋り方がいちいち小汚いよな」
「人の弱みに付け込こんでくるからな」

社会の一番低い所にいるタイプで、下郎でしかあり
えない、あの年であまり見たことがない。板橋でも持
て余して、こちらに回して来たにちがいない。

「今の調子だと、また一戦交えるかもね。その時は腕
にかぶりついてやるよ」

「それくらいの勢いが大事だ」

「俺はやるよと思ったら、やるよ」

「その時は、俺も手伝うから」

川辺が話に乗って聞いてくれたからか、所は納得し

落ちついて帰って行った。

二、三日したら今度は川辺に難癖をつけてきた。朝、仕事の始まる前に作業場にいたら、島田がせかせかした勢いでやって来た。

「おい、あんたは俺のことを辞めるべきだと言ったそうだな。そんなことを言う権利があんのか」

「そうは言っていない。ただ、金持ちの来る会社じゃないと言った」

「誰が来たっていいだろう」

「少なくとも、分相応の人がふさわしいよ」

「しかし、俺は誰にも迷惑をかけていない」

「それでも俺には解せない」

「仕事もちゃんとしているぜ」

「そういう問題じゃない。社会の通念に反するのはいけないよ」

「そんなの関係ない」

「あんたの代わりに善良な貧乏人に入ってもらった方がいいからさ」

始業のベルが鳴るまでごちやごちや言い合ったが、らちが明かず、従業員も入って来て、うやむやになった。

そんなやり取りをして以来、島田とはぎくしゃくと

したが、川辺は無視していた。また何か言ってくるかとも思っていたら黙っている。自分でも分かっていような気がした。

十月も半ばになると、だいぶ肌寒くなり、ある日の昼食後、三階の歩廊に行つて、皆で日光浴をした。眼下に小名木川が流れている。この川は徳川家康が行徳の塩を運ぶために掘削し、今では水運を終えて、浚渫船や遊覧船が行き来しているくらいだ。温かい陽が差して気持ちがいい。

「川辺さんは、今の団地に住んでもう長いのかい」矢沢が話しかけて来た。

「子供が生まれてからだから、十二、三年かな」

「俺、たまに一丁目団地に行つてみたいな。屋上から見渡してみたら、どうだろうね。相当、様子が変わっているだろうな」

「変わったねえ」

「あの頃、バーのホステスと同棲していたよ。それが今となって思い出されるなあ。これでも、もてたからねえ」

「薄みつともない自慢話をしやがつて。何だったら、女房をもらつて、世帯持ったらいいいじゃねえか」

所が厭味つたらしく言った。

「自分も奥さんしてもらいな」と矢沢も返す。

「おめえのことを、心配してやっているんだよ」

「有難うよ。大恋愛するよ」

「おめえなんぞに添いとげる女の顔が見てえよ」

「恋人が出来たら、紹介してもいいぜ」矢沢が余裕ありげに言う。「ところで、タバコあるかい」

「ふん、またかい」

「一本くらい、いいだろう」

「一本が二本になり、キリがねえ。ほら、すいな」所がぼんと投げた。「有難く受けとりな。この宿無しめ」

「宿無しだと！」

「本当だろう。住む家もなきや、タバコ代もねえくせに」

「そこまで言うなら、いらねえ。返すよ」

矢沢は怒って投げ返した。

「ちえッ、やせ我慢張りやがって」

所が舌打ちした。矢沢は話をそらすように遠方に視線をやって、

「あのスカイツリー、建って大分経つだろうな」間の抜けた口調で呟いた。

「そんなことどうでもいい」

「五、六年になるかな」と矢沢。

「つまんねえことに悩んでいるんだなあ。あその事務所に携帯電話で聞いてみる」

「そんなもの持ってないよ」

「何、ケータイを持ってねえのか」

「事情があつてな」

「そんな奴が今の世の中に、生きていけるか」

矢沢は仕方なさそうに黙り込んだ。気の短い所はすぐに激昂し、怒り出すと手がつけられないからだ。いづだったか鳥のガラが仕事上の注意をしたら、物の言い方が命令口調だと腹を立て、そのあげく近くにあった消火器を掴んで、足を引きずりながら、ガラを追いかけた。そんなところを見ているだけに、不用意に反撃しないようにしている。それでも業を煮やしたのか、口下手な矢沢が所に向かってこう主張した。

「俺が本気になつたら、あんたなんかには負けないぜ。ただ相手にしないでだけだ。あんたは自分の弱点を武器にして、こっちの力を封じているけど、それは卑怯と言うものだ。あんまり人を舐めないでくれ。俺はこれから金を溜めて、まずアパートを借りて、今の境遇から抜け出して、自分を取り戻すよ。俺にもプライドがあるからな」

訥々とした喋り方だった。所は矢沢の方を見ないで

沈黙して聞いていた。何か感じているものがあるのだらう。皆が静かになると、矢沢は立ち上がり、ぶつすらしでどこかへ行ってしまった。相当怒っているに違いない。川辺は気になって、

「ちよつと見てくるよ」と断った。

「機嫌を直してやってよ」

所が笑いながら言った。矢沢の行くところは分かっている。彼は昼休みになると、一階のラインにベニヤ板を敷いて昼寝をする習慣である。この頃では寒くなつたから登山用の寝袋を利用するようになった。エレベーターで降りて、そこへ行くと矢沢が足音に気がついて、こつちを見た。

「やあ、気分良さそうだね」声をかけた。

「ここは最高だよ」矢沢はニコニコしている。さっきの不機嫌はどこにもない。

「いかにも安息の場って感じがするね」

「ああ、これで、くるまっている、身も心も安らぐよ」

倉庫の中は消灯しているから真っ暗だ、昼寝にはもつてこいだらう。

「川辺さんさ、俺、何も好きこのんで施設に入っている訳じゃないよ。行くところがないから仕方がないのさ」

「気にしなくてもいいよ」

「奴さんは言いたい放題のことを言うからな」

「でも、彼は分かっているよ。さっきの矢沢さんの言

い方は筋が通っているし」

「俺もスツとしたけどな」

「それでいいよ」

「言つてよかった」

「ゆつくり寝てよ」

「うん、ありがとう」

島田が休みがちになった。どうせ退屈しのぎに勤めているのだから、好きなようにすればいい。一週間が過ぎ、十日経つても出てこない。矢沢も川辺も結構なことだと歓迎し、リラックスした。ところが三時休みの時、島田がひよつこりと姿を見せ、いきなり退社の挨拶をした。

「家内が子宮ガンで入院してね、かなり悪くて、毎日看病で大変なのよ。申し訳ないけど、後をよろしく頼みます」

島田にしては珍しくまともな口調で述べた。青ざめた顔を見ていると、不憫でないことはなかった。社員達は慰めたり同情したりした。

「島田さんがいないと、寂しいね」鳥のガラがしんみりした口調。

「治療すれば必ず治るよ」

「そうだよ」

「奥さんの病気、治ったらまた来ればいい」

「待っているよ」

「大事にしてあげてよ」

皆は口々に言葉を発し、そして島田のシンパ達は外まで行って行って見送った。川辺や矢沢や所達は気の毒よりも島田がずっといなくなるかと思うと、心から安らいだ気分になった。

夕食の卓を囲みながら、妻の明子に島田の話をした。

「どんな様子だったの」明子が聞いた。

「やっぱり、憔悴していたね」

「お気の毒ね」

「性格の悪い奴だけに、ああいう場面では却って可哀そうな気がしたね」

「寂しいのよ」

「奥さんが死んだら、ますます孤独になるだろうな」

島田の話をしていたら、外で鳩の気配がした。

「鳩が二羽もいるわ。見るからに可愛げがないわ」

明子がサッシの窓の方に視線をやっている。

「キリンに食べてもらえばいいのよ」娘の由香が突飛なことを言う。

「キリンが鳩を食べるのかい」

「動物の本で、キリンが鳩を口に啜くわえているのを見たもん」

「へえ、面白いね」川辺は感心した。

「キリンは草食動物だけど、時々鳩を食べたりして、蛋白質を補っているのよ」

明子が教えてくれた。あの長い首を振り回して、獲物を取っている瞬間を想像すると、楽しくなった。

「でも、あの鳩、ヨタヨタしているわね」

妻は、今度は心配そうな表情をした。

「本当だ。どうしたのかなあ」

由香が立ち上がって見に行くと、二羽とも飛び立ってしまった。

次の日の朝、ひさし屋根の上に一羽が蹲すくまっていた。病気でもしているのか、相当衰弱しているようだ。そのうち、つがいと思わるのがやって来て、かたわらに付いてやっている。人間で言えば、看病したり、心配したりしているのだろう。他の連中は知らん顔をしている。よほど弱っていたのか、間もなく死んでしまっ

た。朝方、ここへ来て三十分も経っていない。その直後、またつがいの片割れが降りて来て、遺骸の周りをクウクウ鳴きながら、何度も歩き回っている。

妻と由香が新聞紙に包んで、団地の庭に埋めに行った。片付けた後も、先ほどの一羽だけが戻ってきて、屋根の上を徘徊している。そういうことが二、三日つづき、それらの光景を台所から見ていた由香が、「鳩も人の子だねえ」とヘンなことを言った。

会社で島田が退社した後、しばらくして矢沢も黙って辞めてしまった。矢沢がいなくなると、川辺は所と雑談した。どんな時でも飲む話で、しかも大方ビールの話だった。それは所との貴重な回路だった。

日曜日の午後、行くところがあつて、家を出た。途中の鉄工所の庭に咲いている夾竹桃の紅色の花を見ながら駅に向かっていると、明子からスマホがかかってくる。

「矢沢さんという人から、電話があつたわ」

矢沢が会社を辞めてから半年は過ぎていく。

「何か言っていたか」

「出かけていますと言ったら、すぐに切ったわ。暗い話し方をする人ね」

「会社にいた男だ」

「親しかったの」

「いや」

「じゃあ、どうしてかけて来たの」

川辺にもよく分からない。一体、何の用だろう。金でも貸してくれと言うのか。何であろうとも関わりたくなかった。電車に乗ってからも、矢沢のことが気になった。川辺は二十代の頃勤めていた会社やその周辺を見に行くところだった。前々から出かけようと思っていたところで、せつかくの楽しみを邪魔されたような気になった。そこは荒川区の製版会社である。下町の路地にあり、家々が密集していて、先日、アルバムを整理していたら、町名の標識の横に二十一歳の川辺が一人で立っている写真が出て来た。町並みは一変していて、会社の辺りは特定できなかったが、所々に原型を留める家屋があり、往時を忍ぶことができた。帰宅すると、明子が困惑したような顔つきをしていた。

三号棟の屋上から飛び降り自殺があつたと言うのだ。

「死んだのか」

「即死みたいよ」

「無残だなあ」

「それがね、お買い物物の帰り、私に話しかけて来た人

じゃないかと思うの。屋上で見たと言う奥さんから様子を聞いたら、ぴったりなの」

「背が低くて、目が怖いの」

「俺に電話をくれた奴じゃないかな」

「エッ、そうなの」

夕方近く、自転車を引いて歩いていると、半袖のカッターシャツを着た男に、近くの方ですかと話しかけられた。

男は色がどす黒く、病人のような印象で、話しながらあちこちに視線を這わせた。

「そう言えば、小さな池もあったよねえ」

「とつくに埋め立てられました」

「確か、お寺もあったけど」

「お寺は近くに移転しましたよ」

「前と違うなあ」

古い寺の近くにアオミドロの湧いた池があり、かたわらにおんぼろの物置があった。蔓草が巻きつき、丈の高い雑草に覆われていた。小屋の中に青坊主でも住んでいそうな雰囲気だが、それはそれで風景の中に溶け込んでいた。

「埋め立てして、マンションや駐車場になったんだね。」

「ここが江戸川区の蓮場だなんて思えないね。あの頃は、

俺の田舎に似ていたから、好きだったけど。でも、団地の建物だけは変わらないね」

団地は十階建てが四棟あり、川辺一家は三号棟に住んでいる。入居した頃、湿地帯が至る所にあり、澄んだ水たまりにメダカや小さな魚が泳いでいたり、ウシガエルが鳴いていたりした。遅く帰ると真つ暗になり、懐中電灯を用意して外出した。

明子に話しかけて来た男が矢沢かどうかは断定できないが、可能性は十分にある。矢沢は都下の生まれで、肉親はいるようだが不義理していて、帰るにも帰れないはずだ。

「その男はこの団地が建つ時、現場で土木作業をしていたんだよ」

「だから、この辺りのことを、盛んに愛おしんでいたのかしらん」

「俺とも話しかかったのかな」

「きつと、そうでしょう」

「でも、本当にあいつかな」

「その人、眉がこう……」

「急角度に下がっていたのか」

「そう、そうよ」

「やっぱり、矢沢だ」

男は明子に話しかけて、およそ二時間して飛び降りたようである。現場は大方洗い流されて、片付けられた後だった。警察官がハンドマイクで、

「お知り合いの方はいませんか」

呼びかけた。むろん、名乗り出る者はいない。一旦遠ざけられていた子供達が戻ってきて、境目のブロックの上に電線の雀のように一列にいつまでも座っていた。

「遺体はスッポリと袋のようなものに収められているの。もう人間という感じはしなかったわ」

明子がリアルに伝えた。

「スッポリか：あいつの感じが出ているな」

川辺は寝袋の中の矢沢を思い出していた。

「昔の会社、どうだったの」

「建物は見つからなかったな。もう、ないだろう。しかし町並みが懐かしかったよ」

川辺は話しながら熱い紅茶を飲んだ。飲み終わると、自分の部屋行ってベッドに横になった。それにしても、こんなところで死ぬなんて：

矢沢のことをあれこれ考えていたが、すぐに忘れた。